

米元捕虜との市民交流会 2013

10月16日午後2時から、大阪経済法科大学麻布台セミナーハウスを会場に、米元捕虜&家族との交流会が開催されました。当日は台風の影響で交通機関が大幅に乱れ、一時は開催すら危ぶまれましたが、午後には何とか晴れ上がり、60人近い参加者を得て盛況となりました。また、NHKの国際局と報道部の2クルーが交流会の様態を取材し、国内外に放送されたのは意義深いことでした。



司会：小宮まゆみ&田村佳子（POW研究会）

通訳：神山真紀子

資料：元捕虜の方々がいた収容所については別記の資料 PDF をご覧ください。

「亀田収容所」、「小坂収容所」、「善通寺収容所」、「諏訪収容所」、「奉天収容所（満州）」

1. 始めの言葉：有光健（「元捕虜・家族と交流する会」事務局長）



2. 藤田幸久参議院議員（元捕虜招聘事業の実現に尽力）の挨拶

8年前、国会議員としてレスター・テニー氏（註：当時、米元捕虜団体 ADBC の会長）に会った。当時オランダ・イギリス・オーストラリアの元捕虜の招聘はあったが、米元捕虜の招聘はなかったと聞いてショックを受けた。捕虜に対して酷い扱いや虐殺があったことと思うが、これを反省し、両国の懸け橋になりたいと考え、与野党国会議員が協力して取り組み、4年前、民主党政権時代に招聘事業が始まった。アメリカは大震災の後「友だち作戦」などのオペレーションを実施し、尽力してくれた。これからも力を合わせて行きたい。お互いに戦争をしない努力をしなければならないと思う。私は民主党政権時代に、捕虜問題の他、シベリア抑留者の特別給付金、在韓被爆者の支援、硫黄島の遺骨収集などに関与してきた。今回は未亡人にも来ていただいたが、車イスや歩行器の必要な方もおり、皆

さんが動けるうちに出来るだけ早く来てもらうように働きかけをしたい。今回のゲストの中に小坂収容所にいた方がいらっしやるそうだが、父は小坂の出身で縁を感じる。

3. 元捕虜の皆さんのお話



■マーヴィン・ロスランスキーさん(Mr. Marvin Roskansky) 91歳

1940年に高校を卒業して海兵隊に入った。大恐慌の時代だったので軍隊に仕事を求めた。1941年、サンディエゴからグアムに移動した。グアムには20,000人の兵士がいた。同年12月7日に戦争がはじまり、10日に日本軍がグアムに侵攻してきた。1942年1月に投降し、高松（註：善通寺収容所）に送られた。倉庫などで荷役の仕事に従事し、1日12時間も働かされた。終戦までそこにいた。原爆が投下され、私たちは解放された。



■アーヴィン・ジョンソンさん (Mr. Erwin Johnson) 92歳

1940年、19歳で入隊。陸軍の航空隊に入り、ルイジアナ、ジョージア、サンフランシスコと移動した。1941年11月マニラ港に入港し、バターン半島で150人の仲間と共に日本軍に投降した。マッカーサーは奥地に退き、救出にこなかった。「バターン死の行進」が始まった。自由を奪われるというのは恐ろしいことだ。6日間で65マイルの行進後、キャンプにたどり着き、その後もいろいろなキャンプをまわった。ヘルシップ（註：捕虜輸送船のこと。地獄のような航海だったのでこう呼ばれた）に乗って韓国の釜山、満州へと移動し、そこでも転々とした。1945年8月に大連から海軍の船で帰国できた。

■ロバート・ヒアさん (Mr. Robert Heer) 92歳



インターネットで検索すると私の手記が2~3載っている。リバーサイドの高校を卒業すると、1週間後には入隊していた。高校の友人にハラダという日系人がいて、彼は1942年3月にアリゾナ州ユタの収容所に入ったのだが、私もその1週間後に（フィリピンのミンダナオで）日本軍の捕虜になって収容所に入っていた。後年、同窓会で彼と再会してお互いの体験が判った。日本の収容所では楽しい経験がなかった。捕虜時代は武士道やサムライなど知らなかったもので、日本人にどう話しかけてよいのかわからず、日本人の考えがよくわからなかったからだ。

■フィリップ・クーンさん (Mr. Phillip Coon) 94歳



（息子マイケル・D・クーンさんが父に代わってスピーチ）
父は1918年にオクラホマに生まれたアメリカ先住民で、純粋のマスコギクリーク族。（註：会場で部族の氏神に祈る時の布を披露してくれた）。父は1941年に入隊した。マシンガンの仕事だった。1942年「バターン死の行進」を体験し、オドネルの収容所に2年間収容された後、1944年台湾へ。

1945年メルボルン丸で日本に送られ、小坂収容所で強制労働をさせられた。原爆の投下で救われた。終

戦後（占領軍として）日本に戻り、色々な軍務についていたが、この旅行が最後の章になると思う。今は穏やかな気持ちだ。信仰はバプティストチャーチに属している。（ネイティブの言葉で）ありがとう。

■ マージーン・マクグルーさん (Mrs. Marjean McGrew) 故 Alfred McGrew 氏の妻 86 歳



夫はマニラの収容所が一番ひどかったと話していた。日本では数ヶ所の収容所を移動し、最後は諏訪収容所だった。何年か前、諏訪収容所跡を訪問したが、近所の老人夫妻と話しているうちに、夫がこんな思い出話をした——収容所のフェンスの穴から抜け出し、近所の畑からジャガイモや野菜を失敬した。その時道に迷ったが、灯りを頼りに収容所に帰れた。盗んだものはベッドの下へ隠した——その時、通訳が「その畑の持ち主がこの老夫婦です」と言った。それで、夫が「ジャガイモ代を払った方がいいか？」と聞くと、皆さん笑っていた。こんなふうに市民と交流したのが楽しい思い出だ。

■ エスター・ジェニングスさん (Mrs Ester Jennings) 故 Clinton Jennings 氏の妻 90 歳



お招きいただきありがとうございます。私はサンフランシスコから来た。生前、夫は外国に出征するのはエキサイティングじゃないかと思っていたようだが、そうではなかったと、当時の事を話してくれた。コレヒドールで日本軍に投降し、フィリピン内の収容所に2年間にいた後、日昌丸で日本へ送られた。福岡の宮田収容所など複数の収容所で炭鉱の仕事などに従事し、脚気やマラリアなどに罹った。夫は戦後も21年間軍務につき、朝鮮戦争にも参加した。宮田収容所について素晴らしい資料（会場で配布した資料）を作ってくれた笹本さんに感謝する。

■ ローラ・カミングズさん (Mrs. Lora Cummings) 故 Ferron Cummins 氏の妻 87 歳



夫はグアムで訓練後、マニラに移動し、1942年12月20日に捕虜になった。所持品を一切持たずに「バターン死の行進」をしたと聞いた。フィリピン内の収容所では飛行場の整備などの仕事に就き、2年後に日本に送られた。（向島収容所に収容されたが）、終戦当時は体重が95ポンド（約43kg）になっており、再会した時には夫とわからなかった。解放後、体重がすぐに67kgに戻った。

※ここで、マクグルーさんより、戦中のアメリカ先住民の活躍についての話。

クーンさんの出身は、アメリカの先住民として有名な部族。彼らは部族ごとに違った言葉を持ち、第2次大戦中はそれらの言葉が暗号として使われ、非常に重要な役割を果たした。

5. QA タイム

事前に質問を書いてもらい、休憩時間に整理し、QA タイムにまとめて質問しました。

Q1：（善通寺収容所にいたロスランスキーさんに）原爆の雲は見たか？ 後で原爆だと知った時の気持ちは？

A：見えなかった。私がいた東側からは見えなかったが、西側からだったら見えたかもしれない。すぐに

は原爆だとはわからなかった。

Q2：(台湾の花蓮港収容所にいたヒアさんに) 当所でプロパガンダ放送に協力させられことについてご説明下さい。

A：両親へのメッセージを放送するからと云われて録音したが、実際に放送するとは信じていなかった。1945年に帰国後、妹からそのメッセージを受け取った。それは1943年の3月に花蓮港のラジオ局の「Voice in the Night」という番組で放送され、米国内でそれを受信した人が母に届けてくれたものだった。25字のハガキが地元の博物館に寄付してある。「僕は大丈夫です。病気ではなく健康です。キャンディーや煙草がほしいです。愛しています」という内容だった。当時、夫や息子の声が放送されたという話はよくあった。プロパガンダでも、息子や夫が生きることが分かっただけでもよかった。ドイツでも同様の事があり、スパンさんという人は「ドイツから届いた声の手紙」という題で2冊の本を書いている。

Q3：(兄を奉天で亡くしたアン・ジョンソンさん=アーウィン・ジョンソンさんの妻=に) その時の気持ちや、今日本に来て感じる事は？

A：兄の死は母が受け取った電報で知った。兄は母にとっても特別な存在だった。母は大家族を仕切る働き者だったが、ショックのあまりしばらくみんなの前に出て来なかった。その後、家族に意識を向けることがなく落ち込んでいた。南北戦争に参加した有名な将軍は「戦争は地獄だ」と言っている。戦争は双方にとって酷いものである。このまま両国の友好な関係を続けて欲しいと思う。その為にこうした取り組みは大切にしてほしい。

Q4：(未亡人たちに) ご主人の捕虜時代の苦勞話を聞いたことがあるか。今まで会った奥さんの中には、日本に来て初めて捕虜時代の話聞いたという人がいたのだが。

・(カミンズさん) (バターン死の行進?) 25周年のフィリピン旅行に一緒に行った時に、彼の詳しい体験がわかった。

・(ジェニングスさん) やはりフィリピンツアーに参加した時、よく話してくれた。興味深いエピソードがある。旅行に出ると彼はいつも列の後ろにいた。グループの一番後ろにいた方が安心感があるからだというが、これも捕虜になった影響なのではないか。

・(マクグルーさん) 帰国した当時の事は知らないが、結婚後、よく悪夢にうなされている時があった。よく眠れないのか、夜中に映画をみていたりした。窓のそばには立ちたがらなかった。私には収容所の事は話したが、娘には話さなかった。来日の機会に日本の収容所を見せてもらいたいと思う。

(ここで時間切れとなり、質問終了)

6. まとめ・閉会挨拶 (POW 研究会共同代表 内海愛子)



太平洋をはるばる越えて日本へ来ることは心理的にも大変な事だったと思う。徳留さんが話されたように、同じ捕虜でもアメリカ捕虜は扱いが違っていた。ひとつは、英・豪・蘭の捕虜にはサンフランシスコ条約第16条により、一人ひとりにわずかながら賠償金が支払われたが、この時、アメリカは除外されていた。(賠償金を受けた人の) 数は203,599人だが、その額が余りに少ないということで、彼らは日本政府に対して裁判を起こしたが、負けた。アメリカ人捕虜にはアメリカ政府から賠償金を支払われたことはあるか？(元捕虜たちから「ない」との声) それは、アメリ

カの捕虜にはアメリカの政府が米国内にあった日本の資産を処分して賠償金を支払うことになっていたからだ。(元捕虜たちから「その通り」との声)

そうした中、元捕虜の招聘はイギリスやオランダが中心になっていたが、日本政府はようやく4年前から米捕虜を招くようになった。捕虜の27%が死亡したとされる日本側の扱いを巡り、東京裁判で捕虜側の証拠が600点余り使われた。私たちはこれらの調査や勉強をしている。そしてそれらの調査から知ったことをもとに平和を目指したい。アン・ジョンソンさんの話では、高名な将軍が戦争はどちらの側にとっても地獄だと言ったそうです。再び地獄を起さないために協力していきましょう。花蓮港からの声じゃありませんが。

*記念撮影をして会は4時半に終了

<残った質問>

残った質問の中で若い人からの質問が目立ちました。彼らの平和を求めるメッセージを紹介するように時間を配分できなかったのが悔やまれました。

Q:参加者の江本進さんを紹介させてください。江本さんは函館収容所の所長で捕虜を人道的に取り扱った人で知られる江本茂夫中佐の息子さんです。あの時代にどうして捕虜を人道的に取り扱うことができたのか、息子さんに一言話していただければと思います。(閉会后、ヒアさんに江本さんを紹介し、2人で話してもらった。)

Q:この世から戦争をなくすために、私たちにできること、すべきことは何でしょうか？ 或いはどんな気持ちを持つことが大切だと思われますか？ 小さなことでも結構です。

Q: どうして交流会で話をしようと思って下さったのか、その気持ちをよろしければ聞かせてください。

Q: 平和を築くのに必要なことは何だと思えますか？ 多くの日本人(特に若い世代)がこのような歴史を知らない、教えられないことについてどう思いますか。また、日本の若者に伝えたい事はありますか。

Q: これから同じような悲劇を繰り返さないためにはそういう経験をしたことのない世代に対して何かメッセージはありますか。

Q: 日本軍兵士の残虐性は、兵士だけでなく現地住民にも恐れられていたと思う。なぜ無害に思われる彼らにも手を出したのか、もし現地で感じたことがあれば話してください。日本の若者に一言、伝えたいことは何でしょうか。

(高田ミネ)